

センター通信

クリーニング・オールナイト
— 寄贈レコードのその後のお話 —

西川 真樹子

私が覚えている、人生で初めて自分で聞いたレコードは、小学館の雑誌「小学一年生」の付録に付いていたソノシートです。盤面に針をそつと置いて、おもちゃのようなポータブル・プレーヤーから聞こえてくるソノシートの音に、わくわくしながら耳をそばだてていた記憶は今でも残っています。「ソノシート? ああ、あれね」と思われた方は三十路の山を(とつくに)越えられている方が多いでしょう。ご存知ない方にご説明すると、ソノシートとは下敷きのような素材で

できた赤や青のべらべらのレコードです。音質は良くないのですが、とにかく安価で、雑誌の付録や販促グッズとして、一九六〇年代から八〇年代の間に出回ったそうです。⁽¹⁾

そういつたソノシートや実家にあったレコードも、気がつくといつの間にか消えていて、そこから私がレコードを手にする機会はほぼなくなっていました。それが突然、この四月から始終レコードの先行きを思案する立場になりました。ここでは『日文研』五五号(二〇一五年九月)に真鍋昌賢先生が執筆された「浪曲研究をはじめた頃 森川司さんの思い出とともに」からの勝手に続編企画として、ご寄贈いただいたレコードのその後についてお話したいと思います。

さて、前置きが長くなりましたが、私は今年の四月に京都大学より日文研資料課に異動してまいりました。初めての出



ビフォー：SPレコードが入っていた書類用スタンドボックス

向、初めての目録業務で期待に胸を膨らませた私を待っていたのは、約一万枚のレコードのクリーニングです。二〇一四年三月に真鍋先生を経由して寄贈された森川司さんの一万枚のレコードは、二〇一五年に図書館システムにデータ登録されたものの、現物そのものは寄贈された当時とほぼ変わらない状態でした。つまり、三〇枚程のレコードが縦に入った紙製の書類用スタンドボックスが、書庫に三七〇個ぎっしりと並んでいる状態だったのです。

一方、ご寄贈いただいたレコードの音源をアーカイブするために、情報課でレコードのデジタル録音の話も進んでいました。レコードを聞かれたご経験のある方は、レコードの「チリチリ」といった雑音を記憶されていると思いますが、あの音は盤面の傷や静電気のホコリによるものが多く、できるだけクリアな音を録音するためには、これらを取り除かなければいけません。日文研でのレコード録音は、盤面をレーザで読み取る方法で行うため、レコードの盤面を傷つけることはないのですが、通常よりもさらに盤面がきれいな状態であることが求められます。そこで、着任早々の私に突きつけられたのは、レコード一万枚のクリーニングとそれらを保存に耐え得る状態にして書庫に再収蔵することでした。

ここで少し補足しますと、日文研に寄贈されたレコードのほとんどはSPレコードです。今、レコードブームの再燃で、専門店以外でも、お洒落なカフェや本屋さんでレコードを見かける機会があるかと思いますが、その多くはLPレコードで、SPレコードの改良後継版とも言えます。大正・昭和初期に主要な音楽メディアのひとつだったSPレコードは、一九五一年にLPレコードが日本で初めて輸入販売されると、徐々に衰退し、一九六三年に国内での生産を終了しています。SPレコードはLPレコードと比べて録音時間が短く、割れやすく、反りやすいといった特徴があり、同じレコードでも保存方法を変える必要があります。

さて、お話を戻してレコードクリーニングと収蔵の続きです。クリーニングは盤面に専用の洗浄液を垂らし、ブラシで磨いた後、レコードクリーナー（ターンテーブルにバキュームがついたような機械）で汚れた液を吸い取り、クロスで拭いて一日乾燥させます。その後、一枚ずつ中性紙封筒に入れ、一〇枚から一五枚程度を、特注の中性紙箱に入れて寝かせて保存します。LPレコードは同じクリーニングの後、プラスチック製の袋と中厚の紙製ジャケットに入れ、一枚ずつ立てて保存します。これらの保存方法は特任助教の古川綾子先生



アフター：クリーニング後のSPレコードが収められた保存箱

にご相談にのっていただきました。作業自体は業者さんをお願いして、一日約八〇枚のクリーニング作業で、五月から始めて一月末に完了しました。一方、録音の方は一月末現在で九〇〇枚程度が完了しています。録音といっても、盤面の音の状態をチェックするために一枚ずつ聞きながら行っていますので、とても時間のかかる作業になります。その他にもレーベルの撮影も情報課で並行して行っており、こちらは年度内に終了の予定です。

ここまですが寄贈レコードの現状のお話です。クリーニング作業は終了しましたが、アーカイブの完成まではまだ数年かかる見込みです。著作権の問題もあり、完成後すぐの公開は難しいかもしれませんが、いつの日かアーカイブが公開され

て、皆さんにご利用いただける日が来ましたら、完成に至るまでの工程やそれに関わった多くの人間の存在に思いを馳せていただけますと、望外の喜びです。そのときは、きっと日文研の職員がこのお話の後日談をこちらで書いてくださることと思います。つまり、これは未来の「日文研」への私からの宿題なのです。

(一) 田口史人(著)『レコードと暮らし』夏葉社 二〇一五年

一七九頁

(二) 映画保存協会「レコードの適切な取扱いと保存方法」

二〇一六年二月一日

<http://filmres.org/preservation/library01/>

(国際日本文化研究センター資料課目録情報係)